

信 毎 歌 壇

米川 千嘉子 選

我が町にコンビニ三複数現はれて毎組板乾く日の
あり (木曾町) 新村 亮三
明治期に下駄スケートの発祥地諏訪湖は令和にト
ライアスロン (諏訪市) 小林さよ子
梅雨明けの知らせに庭の立葵天辺までもすでに枯
れおり (長野市) 森 ふるか
充足に交交してくる寂しさよ合歓の夕花そよぎ止
ますも (長野市) 近藤 光子
おぼすての昔話が今の世はディスプレイで幸せ長
寿 (伊那市) 松崎りつ子
美しき夕陽の地といふマンダレー戦死の叔父も見
しやその景 (飯山市) 小野沢竹次
胸を拭き顔を拭いて大の里きちんと畳んでタオル
を返す (長野市) 松本 博人
大雨がやんで厨の硝子窓映画の色のように開けた
り (千曲市) 関 津和子
生きてある生かされてあるそれの人生背負ふ
デイの一日 (長野市) 丸山 祐司
五十肩夫に代わりて作る新腕あげる息子はチェン
ソーマンなり (伊那市) 三澤千保子

佳作
海の日がわが誕生日九十三空をとび交ふ自由な小
鳥 (長野市) 小日向栄子
参加した男女共同イベントに男ひとり緊張しき
り (坂城町) 柄沢 満則

第一首、食事をコンビニで買って済ま
すこともあるのだろう。コンビニがあふ
れる都会では、そもそも包丁、まな板を持
たない人もいる。第二首、諏訪6市町村を
巡るトライアスロンの大会。厚い氷が自
慢だった時代は過ぎたが。第三首、異常気
象のもたらす情景ながら、下句に立葵
の独特の姿がくっきり浮かぶ。第四首、
静かで「充足」しているのはわかっているのに。その「寂しさ」に合歓が似合う。

選 評

小池 光 選

二十五年使ったエアコン買い換える家族失うよう
な寂しさ (千曲市) 関 津和子
人生の半分近くは雑草薙りされどわたしは百姓が
好き (麻績村) 塚原ふじ子
雨上がり夕虹架かり息を呑むこの感動に生かされ
ている (千曲市) 倉石みつる
緑内障五度の手術をしたばかり片目でつくるボテ
トのサラタ (長野市) せきたつお
たとたとき日本語あやつるガイド娘木曾節ひと
ふし唄ひくれにき (小諸市) 篠原 昭枝
父の名の標札外さず母一人暮らしの家の整理を終
える (長野市) 宮崎 邑
戦終え配給キップで買いたしスツク履いては洗う貧
しき日あり (松本市) 興 綱枝
散歩道学校帰りの子供らのあいさつうれし手をふ
り送る (長野市) 北沢 京子
風船が入道雲に消えていく園児との別れ惜しみな
がらも (伊那市) 赤羽 正彦
轟音をひとつ響かせ雷さま期待の雨は落とさず去
りぬ (長野市) 島田 怜子

佳作
胸を張れ猫背なおせと妻は言ふ馬鹿にながら励
ましなから (千曲市) 石黒 信幸
暑いかと問えば首振る扇風機クーラーのなき我が
家の支え (佐久市) 町田ゆかり

第一首、家電製品といえども25年も使
えばもはや家族の一員。新品が来たのは
うれしいが心境は複雑。そんなに長い間
よく働いてくれました。ありがとう。第二
首、畑仕事の半分近くは草むしりだった。

選 評

小島 なお 選

独りわれ階段上るとき今日も「よいしょ、よいし
よ」と神さまに告ぐ (長野市) せきたつお
土用の丑うなぎのひつまぶし食べて明日は「町つ
くり環境整備」 (池田町) 小口 美和
コロナ禍に失くした舞台で今君はオーボエを吹く
OBとして (松本市) 川村 聡子
自分でも驚くほどの怒気含む独り言う孤独な暮
らし (松川村) 岡 豊村
手の指のはれを問われて「ハーデン結節」と三
日後思い出したり (千曲市) 荒井よし子
無人駅電車来るまで一時間小銭が無くて使えぬ自
販機 (長野市) 宮沢 信博
夕暮れた居間硝子窓映つてくる見えるのか確か
に自分 (長野市) 青木しげ美
来場所の番付予想は打算的眞つ向勝負を業しめず
おり (安曇野市) 清水 公枝
この歳になれば分かると年としに言ひて歌友は百
四歳で逝く (安曇野市) 一志みゆき
包丁のアゴで帯取り皮を剥くゴールドキウイの果
汁が滲む (長野市) 宮崎 邑

佳作
吾妻寿の記憶辿りて手作りの紙芝居四作目「いま
できたか (下條村) 福嶋田鶴子
海知らぬ母より受けしこの命海の日となる吾が誕
生日 (長野市) 小日向栄子

第一首、独り言も神さまに告げている
と思えばいいのか。日々の懸命がささや
かに灯る結句。第二首、精がつくとは言
うけれど。明日の大仕事、ひつまぶしの
精で乗り切れるか。第三首、現役で舞台
に立ちたかっただろう。それでも誇らか
に伸びてゆく音色に込めた思い。第四首、
思うよりもずっと孤独が自分をむしばん
でいることに気付く瞬間。重ねられたド
の濁音が重たく、のちに哀切にひびく。

選 評